

台掩蔽
ホールひ

令和7年

月曜休館（祝祭日のときはその翌日）

午前 10 時～午後 4 時 30 分

入館無料

展示解説 10月11日(土) 午前10時30分～

石岡市立ふるさと歴史館

茨城県石岡市総社 1-2-10 石岡小学校敷地内

電話 0299-23-2398

500m



石岡海軍航空基地を掘る

■目次

はじめに	1
I 石岡海軍航空基地	2
II 発掘調査	4
III 戦いとその後	6
IV 石岡市の戦争遺跡	8

■例言

本冊子は、令和7(2025)年10月8日から12月27日に開催する石岡市立ふるさと歴史館第42回企画展に際して作成したものです。

展示および本冊子の執筆は、谷仲俊雄(石岡市教育委員会 文化振興課)が行いました。

展示および石岡市の戦争遺跡の作成にあたっては、『フィールドワーク茨城県の戦争遺跡』(伊藤純郎編、平和文化)等、多くの先行研究を参考としましたが、特に下記をはじめとする屋口正一氏の著作を参考とさせていただきました。

屋口正一 1998 『半ノ木讃歌』櫻水物語刊行会

屋口正一 2015 『緑陰荘の午後』

また、戦争遺跡マップ作成にあたっては、土浦市立博物館の「戦後70年「市民の記憶」収集事業」、『戦争の記憶マップ』を参考としました。

石岡海軍航空基地を掘る

アジア太平洋戦争中、茨城県には予科練で有名な「土浦海軍航空隊」（阿見町）や小説・映画「永遠の0」の舞台となった「筑波海軍航空隊」（笠間市）をはじめ14つの海軍航空隊・基地や、5つの陸軍飛行場、2つの民間飛行場が開設されていました。

石岡市内にも、滑空機（グライダー、動力を持たず気流を利用して飛ぶ航空機）の訓練・専門学校を併設した民間の飛行場「大日本飛行場石岡飛行場」（半ノ木）や、「石岡海軍航空基地」が開設されました。米軍からは、前者は「Ishioka airfield 石岡飛行場」、後者は「Ishioka East airfield 石岡東飛行場」と呼ばれ、攻撃の対象となっていました。

石岡海軍航空基地は、アジア太平洋戦争末期に急造されました。滑走路のほか、飛行機を隠す掩体壕（えんたいごう）が30基以上造られ、滑走路と掩体壕の間には誘導路（運搬路）が張り巡らされていました。しかし、滑走路は芝張りで、掩体壕も土を盛り上げただけのものであったことから、戦後の開発で取り壊されたものが多く、詳細は不明な点が多くありました。

近年、滑走路や誘導路跡の試掘調査、掩体壕の測量・発掘調査が行われ、その構造等が少しずつ明らかになってきました。

今回の企画展では、これら石岡海軍航空基地に関する調査成果を紹介するとともに、合わせて石岡市内に残る戦争遺跡の紹介を行います。

石岡が戦争と無関係ではなかったことを知り、戦争と平和について考えるきっかけとしていただければ幸いです。

石岡海軍航空基地

国道6号線の石岡市役所入口交差点の水戸寄りにある中古車展示場やカラオケボックスから、北側へ1km以上にわたって延びる直線道路が3本あります。これが石岡海軍航空基地の滑走路の痕跡です。

昭和20年8月調の「海軍航空基地諸元調査表」によると、「建設ノ年」は「1945-8」で、飛行場は長1,200×幅300mの「芝張」、主要機体数は「小型」、主任務は「空廠整備」、「半地下兵舎1,800平米 指 工事中 未使用」、掩体は「工事中」で、「未使用」とされています。

しかし、「昭和19年石岡町事務報告書」には、「石岡航空基地建設ニ付テモ六月以降各町内部落会ヨリ毎月百名ノ隊員ヲ送りツヽアリ」とあります。また、隣接する石岡農学校（現在の石岡第一高等学校）には昭和20年3月頃より海軍「燕部隊」が駐屯し、校舎は兵舎として提供されたとされます。そのほか、百里原空の天山雷撃隊が一時期移動したという手記もあります。

米軍戦略爆撃調査団文書には、昭和20年7月10日付のものに「Ishioka airfird」（半ノ木の「大日本飛行場石岡飛行場」）とは別に「Ishioka EAST」の名称が現れ、8月13日・15日にも攻撃の記録が残っています。

これらを総合すると、昭和19年6月頃には遅くとも建設が始まり、昭和20年3月頃には完成し、7～8月には米軍の攻撃の対象となっていたと考えられます。

米軍が戦後まもなく撮影した空中写真を見ると、現在も残る滑走路跡のほか、無蓋型の掩体壕、両者を結ぶ誘導路（運搬路）が極めて明瞭に読み取れます。これらからは滑走路の東側、東西約1.1km、南北約1.4kmの範囲に、判読できただけで30基以上もの掩体壕が存在し、それらをつなぐ誘導路が張り巡らされていることがわかります。掩体壕は判読できるものは無蓋型で、飛行機を1基のみ収容可能なコ字式です。幅・奥行は20～30m程度のものが多いようですが、それより小形のものも存在するようです。



▲石岡海軍航空基地の位置図



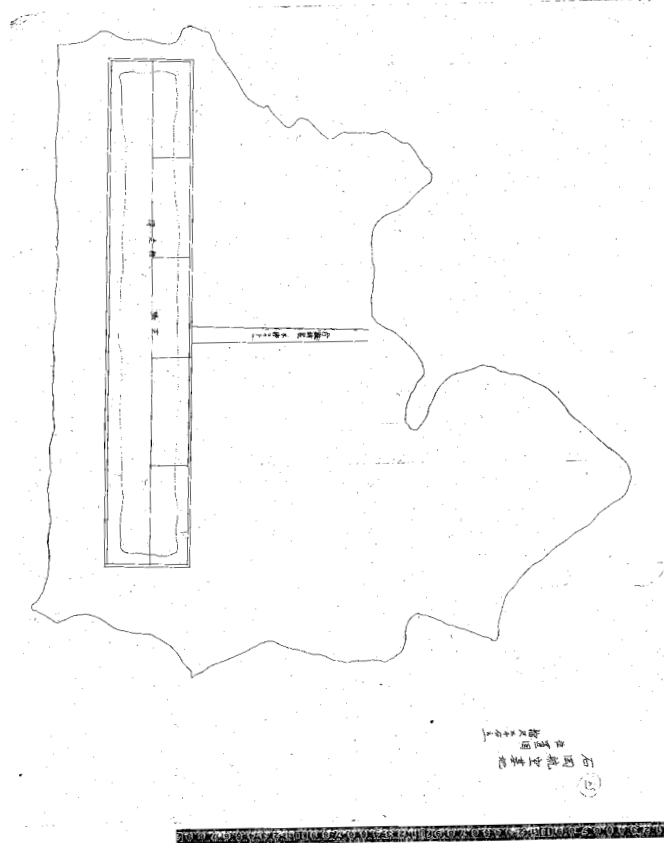
▲石岡海軍航空基地の概要図

左：試製基地要図第三（関東地方）

防衛研究所戦史研究センター（『茨城県の近代化遺産』2007年より）

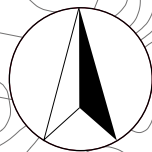
右：米国戦略爆撃調査団文書；空襲目標情報：地域調査

Records of the U.S. Strategic Bombing Survey；Entry 50, Japanese Resources Reference Notebooks, 1945（国立国会図書館デジタルコレクションより）



▲石岡海軍航空基地位置図 防衛研究所戦史研究センター

石岡海軍航空基地 復原図



掩体壕は民有地にありますので、立ち入りはご遠慮ください。
滑走路跡も住宅街にありますので、見学の際にはご注意ください。

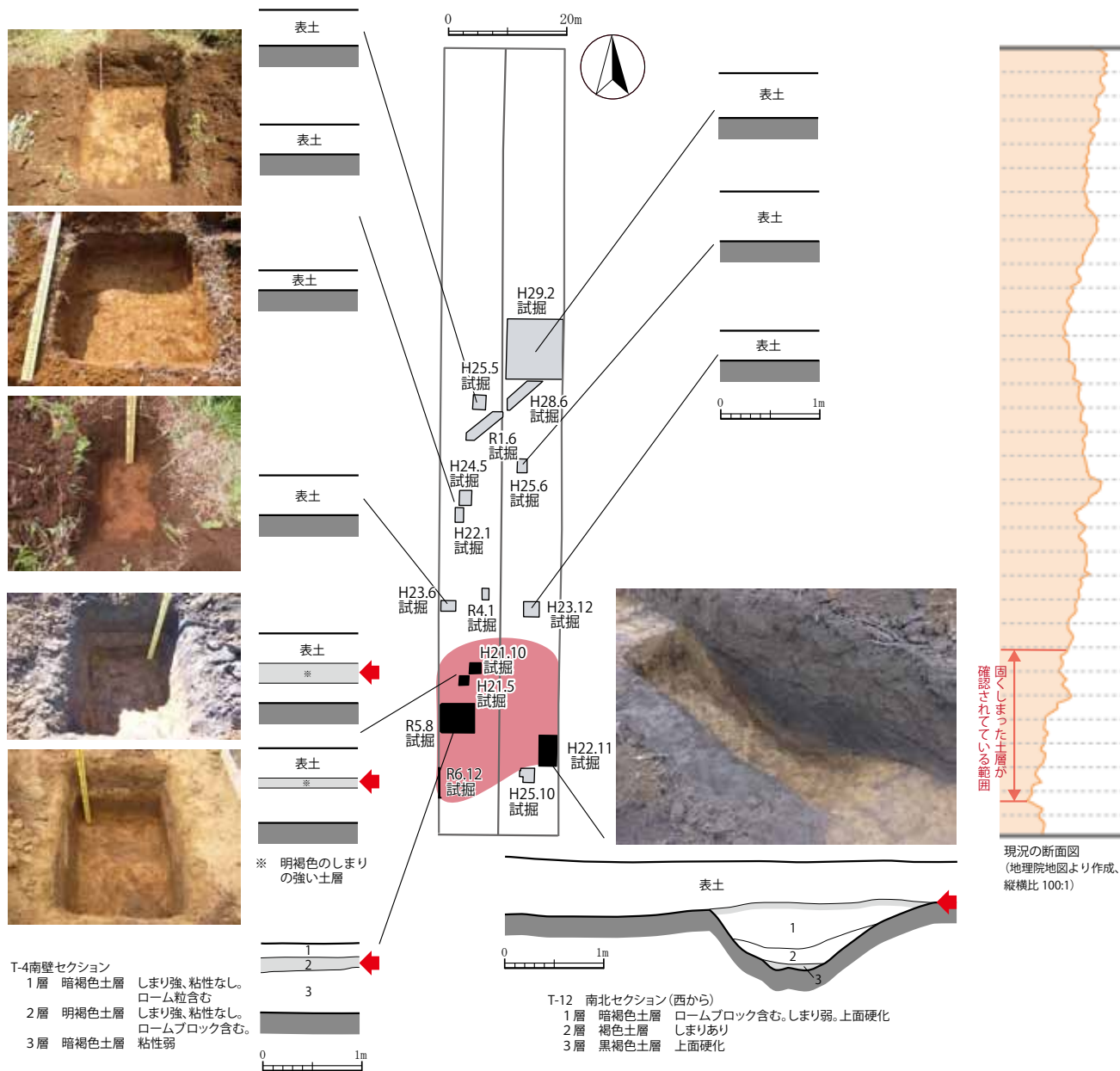
滑走路跡

滑走路跡の南半は周知の埋蔵文化財包蔵地「大塚遺跡」となっていて、開発等に伴って試掘調査等が実施されています（図：滑走路跡の調査状況）。

調査では、現在の地表下15～30cmで、つき固めたような、固くしまった土層（図←）が確認されることがあります。しかも、この土層が確認されるのは滑走路跡の南側部分だけ。もともとの地形は、北側（滑走路中央部分）が高く南側が低かったことから、滑走路の建設にあたって低い南側に盛土し、平坦になるように造成した土層（整地層）の可能性があります。

北側（滑走路中央部分）では、現在の地表下 20～40cm の表土層直下で地山の関東ローム層が確認されています。整地層があってもすでに削平されているか、あるいは地山面までが浅いため盛土による整地を行う必要はなく地山面を削り出して利用していた可能性が考えられます。削り出された土が南側に運ばれたのでしょうか。

航空基地、特に滑走路跡は広大で平坦なことから戦後の開発の対象になりやすく、なかでも石岡海軍航空基地のような芝張りの滑走路で発掘調査が行われ構造が推測できるようになった例は稀で、貴重な調査例と言えます。



▲滑走路跡の調査状況

誘導路跡

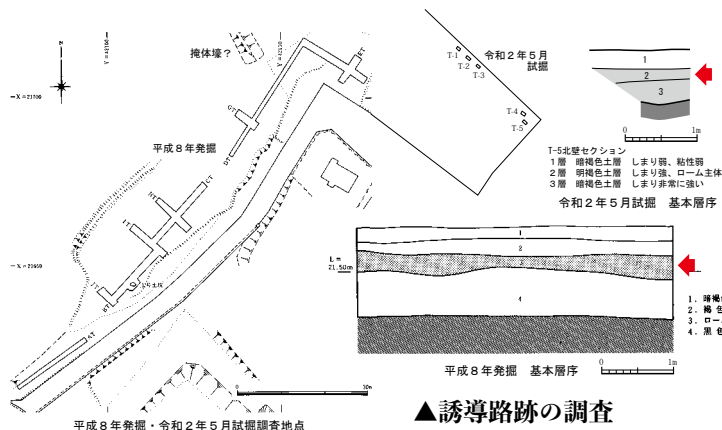
当時の軍の資料によると、滑走路は「芝張」で、駐機場（前庭、エプロン）は「舗装 水締マカダム」となっています。誘導路についての記載はありませんが、当時の写真からは「足踏み固めて整地された」と言われています。

平成8年に発掘・令和2年5月に試掘調査が行われた地点は、調査地のほぼ全域に誘導路が想定される場所でした。平成8年発掘調査では、調査区全域において硬化した二次堆積のハードローム層が検出され（3層、図←）、「飛行機の移動の便を考えて埋め立て工事を行った可能性が高い」と考えられました。令和2年5月試掘調査でも、ローム主体のしまりの強い土層（2層）が検出されていて、その下層もしまりが非常に強い土層（3層）となっていました。

このように誘導路部分についても、埋め立てや整地工事の行われていた様子うかがえます。

誘導路の状況▶

屋口正一 2014「霞ヶ浦
周辺旧海軍施設の消滅」
『CROSS T&T』46より



▲誘導路跡の調査

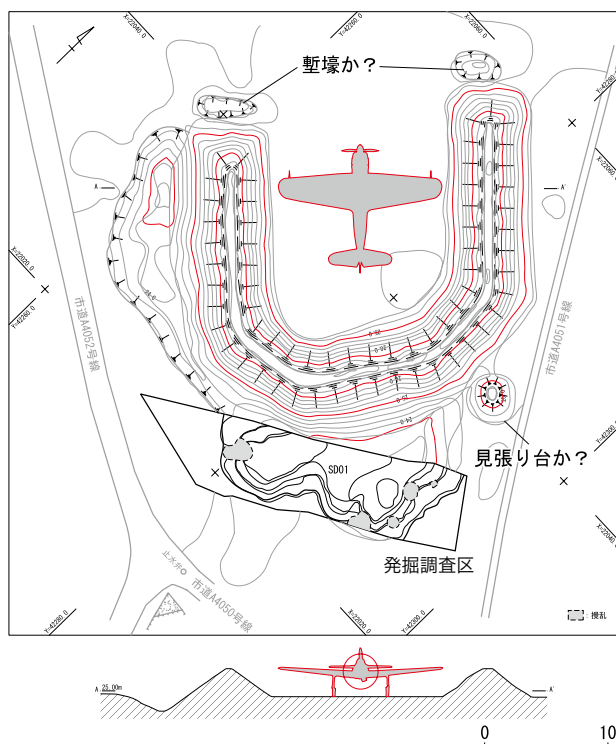
えん たい ごう 掩体壕

戦後まもなくの空中写真をみると、航空機を隠すための掩体壕は30基以上存在していました。現在も残っているのは6基だけです。

そのうちの1基（八軒台掩蔽壕）が、店舗建設に伴い平成26年に掩体壕の測量調査、周掘部の発掘調査が行われました。無蓋型コ字式の掩体壕で、格納部の最大幅は約14.5m、奥行は約17.5m。土堤部の高さは約2.4mですが、平面形は左右非対称で平行四辺形状に歪んでいます。周掘部も土を取るためだけに掘ったというような乱雑な作りでした。

建設には住民や学生が動員されていましたが、設計者はプロであり、軍が指揮監督したはず。完成形の正確さ、きれいさよりも、労働に伴う精神的な一体感の醸成のようなものが優先されたのでしょうか。

また、土堤部の両突端の先には浅い窪みが残っています。兵士が隠れる塹壕の痕跡でしょうか。また土堤部の南東端には高さ1m程度の高まりがあります。見張り台でしょうか。



▲八軒台掩蔽壕

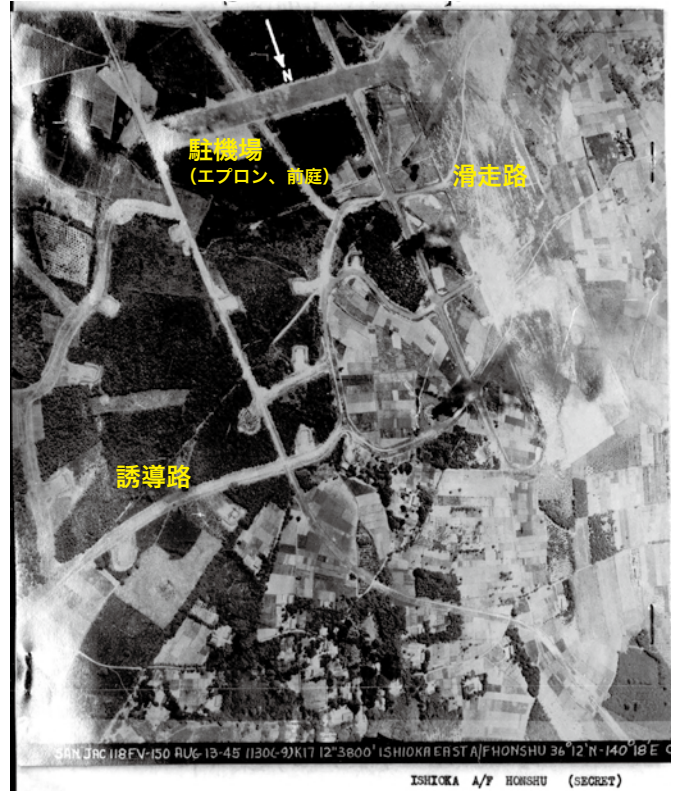
石岡海軍航空基地の戦い

米軍の記録を見ると、昭和 20 年 7 月 10 日付のものに「Ishioka EAST」の名称が現れます。昭和 20 年 2 月頃から攻撃の対象となっていた半ノ木の大日本飛行場石岡飛行場「Ishioka airfield」と区別するために「EAST 東」が付け加えられたと考えられ、石岡海軍航空基地のことを指しています。

以後、たびたび攻撃対象となっているのが米軍の記録からわかりますが、なかでも 8 月 13 日の記録には石岡海軍航空基地を撮影した写真が添付されています（右写真）。

写真には滑走路や駐機場、掩体壕、それらを結ぶ誘導路が鮮明に写っています。しかし、掩体壕の内部を見ると、飛行機を隠しているはずなのに、ほとんどが空っぽ。なかには飛行機らしきものが見えるものもありますが、黒煙のあがっているものもあり、米軍によってピンポイントに攻撃されているようです。

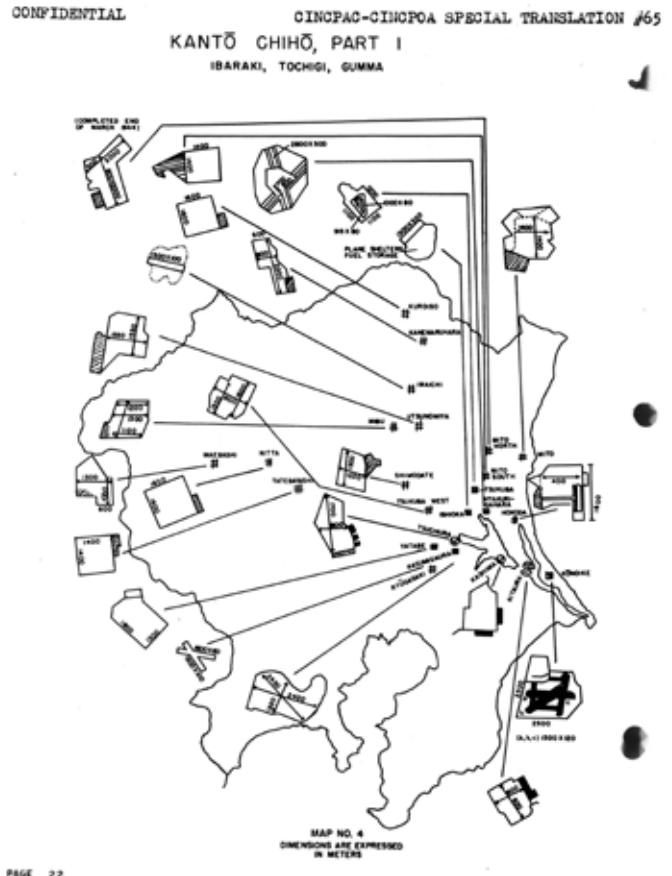
その後石岡海軍航空基地は、8 月 15 日早朝にも攻撃を受けています。



▲米軍が昭和 20 年 8 月 13 日に撮影した石岡海軍航空基地
米軍戦略爆撃調査団文書（国立国会図書館デジタルコレクションより）



▲試製基地要図第三（関東地方）
防衛研究所戦史研究センター
（『茨城県の近代化遺産』2007 年より）



▲米軍戦略爆撃調査団文書；空襲目標情報：地域調査
Records of the U.S. Strategic Bombing Survey; Entry 50, Japanese
Resources Reference Notebooks, 1945
（国立国会図書館デジタルコレクションより）

石岡海軍航空基地その後

ポツダム宣言の受諾により日本軍は解体されます。武装解除にあたり日本軍は兵器等についての一覧表「引渡目録」を作成し、米軍に提出、引渡を行いました。

第一海軍航空廠補給部が作成した「引渡目録」には、「石岡中央誘導路附近」として「零式艦戦六二型 9」、「九九式艦爆二二型 1」、「プロペラ 零式艦戦五二、六二型 17」などの戦闘機やその部品、「九九式二十耗二号固定機銃 508」、「三式十三耗固定機銃 570」などの機銃、そのほかにも「燃料自動車 2」などが記されています。また、「石岡飛行場東側小屋」にも機銃のほか、「航空電話機 80」などが、「石岡中央誘導路小屋」には「機銃弾二十耗一号 2,969」、「機銃弾二十耗二号 16,070」などが記されています。

敗戦後しばらくしてやってきた進駐軍は、「海軍機に油を浴びせ火を放った」と言います。また、「昭和21年秋石岡駅下りホーム西側、上り線貨物荷扱場」には、「石岡航空基地で焼却破壊された飛行機残骸が運び込まれ、石畳の上に積み重ねられた」との伝承もあります。

令和5年、石岡駅東地区（現在の茨城電設スケボーパーク）の建物解体工事中に機銃16挺が出土しました。3～4種類の機種が混在しているようですが、うち1挺の保存処理を令和6年度に実施したところ、「九九式二十耗二号固定機銃四型」と判断されました。そのほか「三式十三耗固定機銃」も含まれているようです。これらは零戦をはじめとする戦闘機に搭載される、航空機用機銃の主力であり、上の「引渡目録」に記載されているものとも一致します。

機銃の出土状況は、聞き取りによれば既存建物の建設等に伴って掘削されていた土中からの出土だったようで、もともとの位置を保ったものではないようです。しかし、16挺という多量の本数からは、建物建設時に持ち込まれたというよりも、建設時に出土したがその際は再埋納され、それが今回再発見されたと考えられます。もとは石岡海軍航空基地の航空機に伴うもので、それが終戦後破壊され廃棄されたのでしょう。



▲石岡駅に集積された残骸

屋口正一 2014「霞ヶ浦周辺旧海軍施設の消滅」
『CROSS T&T』46より



▲機銃出土の様子

石岡市の戦争遺跡

アジア太平洋戦争が終わってから 80 年が経ち、戦争を体験した方々のお話は貴重なものとなりました。

戦争を体験していない世代が戦争を知るには、残された「モノ」が手がかりとなり、なかでも戦争に関する痕跡や記憶が刻まれた「戦争遺跡」が重要になってきます。

「戦争遺跡」は、今回の展示で紹介した石岡海軍航空基地のような軍事施設に限られたものではありません。戦争の被害を受けた場所はもちろん、そのほかにも各学校に建てられた奉安殿や防空壕、学童疎開先となった場所等、多岐に渡ります。

今回の展示で「石岡市の戦争遺跡マップ（暫定版）」として紹介したのはその代表例に過ぎません。そのほかにも多くの戦争遺跡があるかと思います。また、存在していたことはわかっているのですが、その場所がわからず、マップに掲載できなかったものもあります。

ぜひみなさんご存じの「戦争遺跡ー戦争の記憶を残す場所」について、エピソードとともにお寄せいただければ幸いです。

本展示および戦争遺跡マップの作成にあたっては、『茨城県の戦争遺跡』（伊藤純郎編、平和文化、2008 年発行）等、多くの先行研究を参考としましたが、特に下記をはじめとする屋口正一氏の著作を参考とさせていただきました。

屋口正一 1998 『半ノ木讃歌』 櫻水物語刊行会

屋口正一 2015 『緑陰荘の午後』

また、戦争遺跡マップ作成にあたっては、土浦市立博物館の「戦後 70 年「市民の記憶」収集事業」、『戦争の記憶マップ』を参考としました。

[illegible]

①石岡海軍航空基地跡

アジア太平洋戦争末期に急造された海軍航空基地（飛行場）。滑走路跡は3本の直線道路となっています。飛行機を隠す掩体壕（えんたいごう）も造られ、現在でも6基残っています。米軍には「Ishioka East airfield 石岡東飛行場」と呼ばれました。

②石岡アルコール工場跡

現在のピアシティ石岡

昭和12年アルコール専売法が施行され、燃料用揮発油への混用のためアルコールの増産が行われるようになりました。石岡アルコール工場は昭和12年に設置が決定し、昭和13年に操業開始。石岡駅からの専用の引込線も設けられました。たびたび米軍の攻撃を受け、なかでも7月28日の攻撃では蒸溜室やタンク等に大きな被害がありました。昭和21年には昭和天皇が行幸されました。

③石岡駅

明治28年開業。昭和4年の陸軍大演習の際には、昭和天皇乗車のお召し列車が水戸駅・石岡駅間で往復運転されました。たびたび米軍の攻撃を受け、昭和20年8月13日の攻撃では、前夜到着していた弾薬を積んだ貨車が爆発しました。

④千葉陸軍兵器補給廠石岡常駐班跡

現在の明照保育園

昭和17年、陸軍兵器本部の出先機関として、石岡小学校斜め前の酒造会社敷地に新設されました。兵器弾薬や燃料等が扱われていました。

⑤石岡小学校奉安殿跡

奉安殿とは戦前に各学校に建てられた、天皇皇后両陛下の写真と教育勅語を納める特別な建物です。石岡小学校では昭和5年、「府中城の土塁」（市指定史跡）上に造られました。奉安殿は戦後取り壊されましたが、現在でもその土台部分が残っています。また、石岡小学校には、第51軍司令部第44師団（通称「橘部隊」）が置かれました。



▲奉安殿の土台

⑥東耀寺

昭和 19 年 8 月、向島曳舟国民学校の集団疎開学童を迎えました。しかし空襲の拡大から、昭和 20 年 5 月頃、秋田県へ再疎開となりました。

⑦神栄製糸工場跡

現在の石岡イベント広場

大正 6 年に前身の小口組製糸が創業を開始し、会社名の変更を経て昭和 58 年まで製糸業を行っていました。戦時中には軍需関連製品等の生産も行い、また寮には軍隊が駐屯していたようです。統制陶器が多量に出土しています。

⑧国分寺

昭和 19 年 8 月、向島曳舟国民学校の集団疎開学童を迎えました。しかし空襲の拡大から、昭和 20 年 5 月頃、秋田県へ再疎開となりました。

境内にある忠魂碑は昭和 29 年に建てられたもので、西南戦争からの戦没者名が刻まれています。また、忠魂碑の前には昭和 11 年に海軍より下付された砲弾や浮標水雷缶が置かれています。



▲忠魂碑（左）と砲弾（中央）、浮標水雷缶（右）

⑨滑空機工場跡

現在の府中中学校

滑空機の部品等の製造を行っていましたが、戦後、下駄製造工場に転換しました。その後建物は、府中中学校校舎に転用されました。

⑩戦車壕

「鹿の子大塚山古墳」（市指定史跡）の墳丘に掘削されています。昭和 19 年に石岡に駐留していた「橘部隊」の一分隊が掘削したところ、隊長はじめ兵隊たちは悪寒を覚え、悪夢に襲われるなどしたために作業は中止になったと伝えられています。



▲鹿の子大塚山古墳
中央の窪みが戦車壕

⑪大日本飛行場石岡飛行場跡（中央滑空訓練所、大日本滑空工業専門学校）

昭和 16 年に「東洋一」の訓練所と言われた「大日本飛行協会中央滑空訓練所」として開設されました。昭和 19 年には日本初の滑空の単科専門学校として大日本滑空工業専門学校が開校。戦争末期には予科練や予備学生の訓練も実施されました。米軍には「Ishioka airfield 石岡飛行場」と呼ばれました。



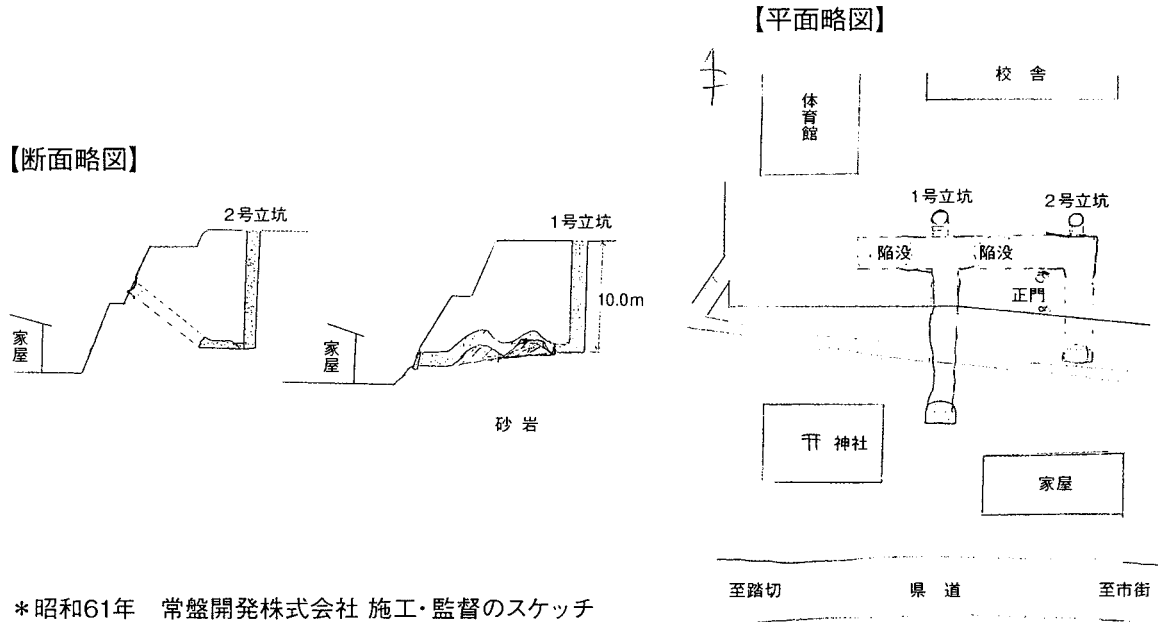
▲偲学の碑

⑫石岡対空監視哨跡

敵機による空からの攻撃をすばやく発見し報告するために設置されました。当初は石岡警察署屋上に開設されましたが、昭和 18 年に移設され高床櫓式となり、終戦まで監視を続けました。

⑬旧高浜小学校

第51軍司令部が置けられました。第51軍は本土決戦に突入した場合、連合国軍の関東上陸作戦で適地になると予想された太平洋沿岸の茨城県鹿行地域の守りに備えていました。校庭には地下壕が掘られました。



*昭和61年 常盤開発株式会社 施工・監督のスケッチ
掘削工事は陸軍部隊の施工によるものでした。

▲地下壕の様子（現在は埋め戻されています）（屋口正一 2015『緑陰荘の午後』より）

⑭弓弦航空殉難慰霊碑

昭和19年6月13日に水戸陸軍通信学校所属の輸送機が山腹に衝突、炎上しました。事故を目撃した近隣の人々が救出に駆けつけましたが、搭乗者は全員死亡。昭和31年、墜落地点には慰霊碑が建てられました。



⑮浄土寺 ⑯善慶寺 ⑰常林寺 ⑱如来寺

昭和19年9月、戸山国民学校の集団疎開児童を迎えました。しかし空襲の拡大から、昭和20年5月、群馬県へ再疎開となりました。

石岡市立ふるさと歴史館第42回企画展

石岡海軍航空基地を掘る

令和7年10月8日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195 石岡市柿岡5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016 石岡市総社1-2-10

TEL 0299-23-2398